

シュガー＊ホリック 1

K a n a & S a g a r a

斉河 燈

Tob Saikawa

termity



エタニティ文庫

目次

| | |
|-------------------|-----|
| 書き下ろし番外編 ミントタブレット | 331 |
| 大人のキスの与え方 | 289 |
| シュガー*ホリック1 | 5 |

シユ
ガ
ー
*
ホ
リ
ツ
ク
1

新婚、って籍を入れてから何年目までのことを言うのだろう。

三年？ それとも一年未満？

なんて、明確な線引きができないことは承知している。

何十年経っても新婚だと言いつ張る夫婦もあるし、何度も同じ相手と結婚離婚を繰り返す夫婦だってあるし、そういうふふわふわした単語を最初から寄せつけない人間も、中には、いる。

そもそも新しいという単語の意味がすでに曖昧なもの。ふんわり解釈はしても、はっきりした定義なんてできっこない。

けれど私はあえて問いたい。だって。

籍を入れてから九年を過ぎてもまだ『本当の夫婦』になれていない私達は、新婚の醍醐味をいつ味わったらしいの？

「相良^{さから}さん、ねえ、相良さんってば」

篠竹^{しのたけ}家の朝は早い。

本日も例に漏れず現在時刻は午前三時、近所の一番鶏は先走った挙げ句調子よく鳴いているけれど、空はまだまだ闇色のまま、明ける気配はない。

「今日、撮影でしょ。起きないと間に合わないよ」

私はコタツで丸くなっている男性の体をゆさゆさ揺する。

毎回のことなのに、どうしてこの人はもれなく寝坊してしまうのだろう。歳を取ると早起きになるとかってあれ、嘘なんじゃないかな。

「ねえってば、相良さん」

こっちはもう目が冴^さえちやったよ。というかもう、早起きが身についちやってるんだよ、誰かさんのお陰で。

誰かさん——篠竹相良は私の戸籍上の夫で、アートディレクターなどという風変わりな肩書きを持つ四十五歳。

ビジネス誌にも取り上げられるほどの腕前を持つ彼だけれど、この通り趣味はコタツでのごろ寝。ベッドどころか布団すら使っていないと言ったら、取引先の人達は驚くんじやないだろうか。

仕事の内容は様々で、映像作品をポンと差し出すこともあれば雑誌の撮影に立ち会っ

たり、某有名ブランドのプロモーションを手掛けたりもしていて、正直、現在何をしているのかは数ヶ月後になってみなければ分からない。

分からないまでも、毎朝お弁当を作っては、頑張ってるね、と言って送り出すのが妻の役割。内助の功という言葉をよく噛み締めるように、と言ってやるうとして、私は首を傾げた。

(足の裏があったかい……?)

もしやとホットカーペットのスイッチを覗けば、「入」のランプが煌煌と灯っている。またやったよこの人!

「カーペットとコタツのダブル暖房はダメだって何度も言ってるでしょ。いつか低温火傷しちゃうからね」

十一月に暖房器具を引っ張り出してから二ヶ月、何度この台詞を口にしたか知れない。相良と書いて、反省する気のないオッサン、とでも読んでみようかな。

「ねえ、聞いてる?」

「……オジサンは耳が遠いんだよ。そうカッカするな」

「こういうときだけオジサンぶるなんて狡いよ。まだ四十五のくせに」

「言うようになったな、香奈も。立派だ。よしよし」

「子供扱いしないでよ。私、もう二十六になるんだよ」

「んー」

呂律は回っていないくせに、やや早口。こういう口調のときはまだ寝ているのだと、ここ数年で私は学習した。

他にも、このまま数秒のうちにまた寝息が上がるだろうとか、あと五分と言い出すだろうとか、学習したことなら山ほどある。相良さんと違って。

「あとごぶん……」

「やっぱり言った! でもダメ。今日こそはダメ。それで昨日も一昨日も遅刻しそうになってヒヤヒヤしたって言ったのは相良さんだよ?」

忘れちゃったの? 忘れちゃった、んだろうな、この調子だと。

カーペットの上にお尻をつけて、私は腰に両手を当てる。

毎朝のこの攻防、他の家庭ではどうやって攻略しているのだろう。聞いてみたい。聞けないけど。

そう——聞けないし、言えない。

相談できる人なんて周囲にはひとりもない。

まず、こんなとき最も頼りになるはずの親が最もアテにならない。なにしろ彼らは、同じ相手と結婚と離婚をもう十回も繰り返し返している変わり者だ。

おかげで私は「普通の家庭」とは無縁で育った。だから夫婦の在り方なんて知らない

し、平凡な結婚生活を垣間見たことすらない。

それに——相良さんと籍を入れたのは、私が十六歳になったその日のこと。在籍していた高校にはどうか許可をもらったけれど、誰にも明かせるはずがなかった。歳の差が十九もあれば好奇の目で見られるに決まっているし、勢いだけだと思われるのが嫌だった。

長い片想いの末に、彼がやっと振り向いてくれたこと……それを、おもしろおかしく脚色して言いふらされたりしたくなかった。

そんなことで秘密にし続けていたら九年が経過し、今度は別の意味で言い出しにくくなってしまったというわけ。

誰かに相談したいことなら山ほどあるんだけどな。

そう、たとえば、彼はいつになったら私の隣で寝てくれるのか、とか。

「……スキだって言ったくせに」

どうして九年以上たった今も、手を出そうとしないの？　ねえ、相良さん——

結局、彼がコタツを抜け出したのはそれから十五分も後のこと。

焦る私を尻目に、相良さんは三分少々で難なく身支度を整えてしまう。

短く清潔に揃えられた顎鬚と、若干ウェーブがかった髪、黒のオーダーメイドスーツ。

ジャケットからは、同じく黒のシャツとボルドーのベストが絶妙なバランスで覗いていて、センスの良さは街角にいても一目瞭然だ。

そのうえ体には程よく筋肉がついていて一切の無駄がなく、シルエットはそれだけで芸術品みたい。四十五歳には、到底見えないと思う。

加えて彫りが深いからか、相良さんは昔から父とも、祖父とも、私の同世代の男の子達とも違う生き物みたいに見えた。

ここだけの話、私は小学校の高学年になるまで、本気で彼を童話の中から飛び出した王子様と思っていたくらい。

自分を迎えに来てくれた、とも——
「じゃあ行ってくる。夕飯は撮影隊と一緒に食ってくるから、おまえは別に済ませて先に寝てろ」

玄関で革靴に足を入れながら相良さんがそう言ったから、私は愕然としてアゴを突き出した。

「えっ、また!?　昨夜も飲み会だったのに……」

いや、一昨日もだ。一週間の半分がこれってどうなんだろう。

落胆を隠し切れずにいると、子供をあやすようにひよいと抱き上げられてしまった。

「許せ。今度埋め合わせするから」

間近で悪びれる様子もなく言つて、「行つてきます」だか「お詫び」だかのキスをちよんと寄越す。

いつもの手口だ、と分かったからこそ私は大人しくそれを受け止めた。
「分かった。……気をつけてね」

そして、あえてキスひとつで物分かりの良い妻を演じる、私もいつもと同じパターン。進歩がない？ ううん、そういうことじゃあない。

「おう。どこか行きたいところとか、欲しいものとか、食べたいものとか、あれば遠慮なく言え。ああ、こないだの叙々苑じよじよえんは美味かったな」

「うん、じゃあ今回もここにする」

「そうか。しかしおまえ、本当に食うのが好きだよな」

私を玄関にストンと降ろし、相良さんは颯爽さつそうと背を向ける。分かってないなあ、と嘆息なげしながら彼の後頭部を見つめた。

——相良さんは気付いていないんだ。

「こんなとき私が毎回、極力短時間で済ませられる「埋め合わせ」を指定していること。本当は泊まりがけで旅行にでも行つてみたいけれど、言わないでいること。」

だつて言える訳がないもの。毎日帰宅が真夜中で、背中にも疲れ感が滲にじみ出ている彼には。

「いい子にしてろよ」

「うん。いつてらっしゃい。気を付けてね！」

そうして真つ暗闇の中に彼を送り出した後、私は洗濯機のスイッチを入れてから二度寝をしたのだった。

起床したのは六時過ぎ。今日は仕事の日だ。

私は相良さんと同業の人にアルバイトとして雇われている、いわゆる雑用係。

芸術にあまり興味はないのに、何故この業界にいるかという、理由はずばりひとつ。

相良さんのパートナーとして彼の役に立つため。妻として、彼をもっと近くで支えられる人間になるため。……なのだけれど、これこの通り、毎日置いてけぼりでこき使つてももらえない。

（まあ、今の仕事は楽しいし、別にいいけど）

いいのだけれど。でも。

相良さん、私のこと、やっぱりそんなに好きじゃないんじゃないかな、なんて勘繰かんぐつてしまう。だつて、好きだったらもつと側にいたいはずでしょ？

そんなことを考えてぼんやりしながら洗濯物を畳み、部屋中に掃除機をかけた。食器類は汚れがひどいものだけ手で洗つて、あとは食器洗い乾燥機に入れ、スイッチを押す。

主婦業に休みはないのだ。

こうしていつも通りメイクもそこそこに家を出ると、門の前に停まっていたのは見覚えのある、赤のフォルクスワーゲンだった。

「香奈ちゃん、おはよう。これから出勤よね？」

「……ざ、財前さん」

嫌な人に会ってしまった。引き返したいけれど、無念、行かなければ間に合わない。

「乗って。送って行くわ」

運転席からヒラヒラと、私を招く手。真つ赤なネイルは彼女の派手な容貌と綺麗な巻き髪には合っているものの、ちよっぴり毒々しい。

「け、結構です」

「そんなに身構えないですよ。私が恋敵だったのは遥か昔のことでしょう」

そうなのだ。何を隠そう、財前さん——財前詩文さんは御年三十八歳、相良さんの一番弟子であり、彼に長く焦がれていた人でもある。

私が妻の座を得たことで身を引いてくれたし、今は別の人と結婚して家庭もあるから、確かに昔のことなのだと思う。でも……

「いえ、あの、職場近くはゴミゴミしてますし。車より電車のほうが早いですから」
正直、あまり会いたくない。

「邪険にしないでもらえると有難いんだけどなあ。私は篠竹さんに頼まれてわざわざ仕事の合い間に来たんだから」

相良さんに？ 踏み出そうとしていた足を思わず止める。

すると彼女は私の前方に回り込んで来て、ドアを全開にすると車の後部座席を示した。「えっ」

顎を突き出して二度見してしまったのは、そこに花東が乗っていたからだ。両手では抱えきれないくらい大きなガーベラの花束が。

手前にメモが見える。香奈へ、つて、あの字……間違いない、相良さんの筆跡だ！

「篠竹さんからよ。あなたにとって」

「ど、どうして……」

「朝泣きでうな顔をしていたらしいじゃない？ お詫びのつもりなんじゃないかしら」
お詫びに、わざわざ？ 忙しいのに？ 嘘みたい。財前さんの前にもかかわらず、じわ、と涙が滲んでくる。

「まったく、公私混同して部下を使うなら、もう少し時期を選んで欲しいわよね。私、今日は午後からプレゼンだっていうのに……なんて、志願したのは私だけどね」

目尻を拭った私を前に、そう財前さんが零したときだった。バッグの中で、携帯電話が勢い良く震え出したのは。

電話かと思ひ慌てて引っ張りだしてみれば、それはメールの着信。

『貢ぎ物、受け取ったか？ 今日飲み会は五分でフケることにした。二十一時に迎えに行くから家の前で待ってろ』

相良さんの会社のパソコンのアドレスからだった。

（うそ……！）

突然の朗報に、指が震えて返信ボタンも押せなくなる。

迎えにくる、つてもしかして……ううん、もしかなくてもデートだよね？

「篠竹さんからみたいね。とりあえず乗って。お届け物は花だけじゃないの」

自失状態の私を強引に後部座席に押し込め、財前さんは運転席に戻る。そうしてドアを閉めると、助手席にあった紙袋をつぎつぎとこちらに寄越した。

「これがワンピースでしょ、こっちがハイヒール、それとハンドバッグに下着も一式あるわ。取りこぼしなく受け取ってね」

「ちよ、ちよっと待って下さい、これ、一体」

「全部篠竹さんからよ。今夜のデートに使うようにって。リストをぼんと手渡されて、かき集めるのに苦労したわ」

呆然と口を開いてしまった。プレゼントならたまにもらうけれど、こんなにいつべんに渡されるのは初めてだ。今日に限ってどうしたのだろう。誕生日なら、あとひと月は先なのに。

「あなた達、本当にそっくりよね」

財前さんは腰まである見事な巻き髪を揺らして笑い、ぶおんと豪快にエンジンをふかした。私のアルバイト先まで送ってくれるらしい。

「ど、どこがですか。私、こんな散財しませんよ。わああ、この靴、家紋的マークの高級品じゃないですか。も、もらえませんか」

「素直に受け取っておきなさい。コネで売ってもらっちゃったから返品はできないし」
「でも」

「遠慮が過ぎると、本当に大事なものをなくしちゃうわよ」

……え。

「あなた達は夫婦揃って不器用すぎるわ。いい？ そろそろがむしやらに奪取しないと後悔するから」

何が言いたいのだろう。

私は黙して車内を見回す。無機質なくらい綺麗で、BGMも芳香剤もない空間は派手好きの財前さんに正直似つかわしくない。察するに、相良さんが嫌うから整理してある

のだろう。

彼は無駄な装飾品だとか歌謡曲だとか、そういう大衆のものは、集中を妨げると言っ
て身の回りには決して置かない。

つまり相良さんはこの車に頻繁ひんぱんに乗るということで——それは仕事上仕方のないこと
で——わかつてはいるのだけだ。

フォルクスワーゲンは走行音を響かせ、私の気持ちを静かに追い立てる。

その後も彼女は世間話ばかりを三十分もしたけれど、私はすべて上の空でしか聞けな
くて……疑問は塊のまま、胸の中にごろっと残ったのだった。

仕事から帰ったのは、茜色の夕日もすっかり姿を消した十八時半だった。

帰宅したらまずキッチンへ向かって炊飯器をセットするのがいつもの流れなのだけ
で、本日は二階の自室に直行した。

早速、頂戴ちやうだいしたショップバッグの中身を上げると、出るわ出るわ、ピアスにプレス
レットにハイヒール、バッグに靴にワンピース、化粧品、そしてスケスケ素材の下着一
式。こういうの、ランジェリーって言うんだっけ？

「これ、相良さんの趣味、なのかな……」

値段はもう考えないことにするとしても、全体に漂うセレブっぽさは自分に似合わな

い気がして、どうにか抑えられないものかと考えてしまう。それとも私の感覚が庶民的
すぎるのだろうか。

服といえば普段の私はカジュアルめの全国チェーン店で事足りる。今着ている服も
ロールアップデニムにボーダーカットソーで、全身のコーディネート引ひく括くめても五千
円でお釣りがくるくらい。

(でも、確かに、こういう服のほうが相良さんとは合うんだよね)

胸元がぱっくりあいた黒のワンピースは、ボルドーのベストの隣に立つと最高に引き
立つ一品に違いない。

「……着てみよう、かな」

財前さんも遠慮するなど言っていたし、返品できないのなら、やつぱり着るしかない
よね。

と、いうことで全身をまるっとハイブランドで固めた私は、地味な顔の違和感に焦あせ
つてメイクをし直した。いつもナチュラルメイクだから、時々オシヤレをしようとすると
すごく焦る。

すると、姿見に映った自分は驚くほどしっくりと彼のプレゼントに馴染んだ。流石さすがは
アートディレクターだ。それにしてもこれ、胸元があいっている割にネックレスの類たぐいいが
見当たらないのは何故だろう。

（手持ちのアクセサリーはどれもチープだから合わないだろうし、このままで充分素敵だからいいよね……）

こうしてなんとか時間に遅れないよう家を出たのに、彼はすでに門の前に車を横づけにして待ち構えていた。

「おう。時間ぴったりだな、香奈」

愛車の窓枠にのせていた腕を、顔の横に持ち上げて再会の挨拶をくれる。そんな些細な仕草さえサマになるところが憎い。

「ごめん、待たせちゃった？ クラクシオンを鳴らして急かしてくれても良かったのに」慣れないハイヒールでよろよろと駆け寄ると、相良さんは私の頭の先から足の先までを視線で一往復して、ぼつりと言った。

「……やっぱり、逃がしてやる道はナシ、か」

「ナシ？ このワンピースの着方、間違えてるかな。変？」

「だったら見惚れねえよ。早く乗れ、今夜は存分にほだしてやる」ほだし……どういう意味だろう。

久々に着飾った姿が恥ずかしくていそいそと助手席へ乗り込むと、私は素早くシートベルトを締めた。待ち構えていたかのように、車は滑らかに発進する。

「どこ行くの？ 焼き肉？」

「いや、もっと良いところだ」

「うん？ もっと良い肉がおいてあるところ？」

焼き肉より良い肉、となるとさしずめステーキだ。和牛だろうか、あ、主食はライスをぜひ希望したい！

ミディアムレアな断面を想像して口中を潤わしていると、運転席の彼はがっくりと肩を落とした。

「……おまえは肉に執着し過ぎだ。まあ、そこが可愛いんだが……まずはドライブからでいいか？ 遠回りして、夜景でも眺めつつ行こうと思う」

「うんっ！ 嬉しい、ドライブなんて久しぶり！」

去年の春に那須へ行つて以来だから、ふつと口の端で笑われてしまった。嬉々として鼻歌を唄っていたら、ふつと口の端で笑われてしまった。

それは穏やかで知的で、洗練された雰囲気なのに少年っぽい笑顔。

好きだなあ、としみじみ思った。

相良さんにとって、私はまだまだ子供で、手を出すまでの存在ではなくても……やっぱり好き。お飾りの存在でしかなくても、いつまでも側に置いて欲しい。

妻のままでもいいさせてもらえたら、それだけでいい。

「わあっ、レインボーブリッジ！ きれーい！」

夜の都心、車は一般道の混雑を抜けて、流れるライトのひとつになる。視界を流れるのは、パヴェセットされたダイヤのような光の粒だ。電車から見る景色と全然違う。

「ベタかと思っただがな。バブルっぽくないか？」

「そんなことない！ こういうの本当に嬉しいっ」

夜景をプレゼントされて嬉しくない女子はいないと思う。しかも、好きな人とふたりきりというシチュエーションだもの。大満足だよ。

「なあ、香奈」

「うん？」

「もうすぐ十年だな」

ハンドルを操作しながらの声はほんやりしている。何が、とははっきり言われなかったけれど、意味はすぐに分かった。

「そうだね。夫婦になってから、もうすぐ十年。プロポーズされたときはびっくりしたよ。私、相良さんには何度もフラれてたし」

今でもはつきり覚えている。

最初に告白したときの彼の返事は「オムツを替えてやったガキに欲情はしねえよ」で、相手にされず一笑に付されたこと。

あのあと、確か一週間は毎晩泣いたんだよね。相良さんは知らないだろうけれど。

「そりゃ、小学生に告白されてOKできる社会人はそうそういねえだろうよ」

「中学生だったもん！ ランドセルを背負ってたら相手にされないだろうと思っつて、セーラー服になるまで我慢したんだから」

「同じようなものだろうが。おまえは親友の娘だし、赤ん坊の頃から見てきたし、だからひっくり返ったって手は出せねえと思っつた」

相良さんは窓のふちに片肘をついてクツ、と喉の奥で笑う。自嘲するみたいに。

「それならどうして結婚しようなんて言ってくれたの」

「どうしてだろうなあ」

「何、その無責任な回答」

「いや、最初はな、意地みたいなものだったんだ。雅也……おまえのオヤジは友人としてはいい奴だが、父親としては失格だったからな」

彼の言葉は哀しいかな的確だ。

うちの父は父親として失格。それは私も感じていたし、きつとどこの誰が見てもそう言うと思う。

なにしろ父は、ひとり娘をほうって妻と結婚したり離婚したり、要するに子育てを放棄して色恋沙汰にうつつを抜かす人間だったのだから。

それは、私を置いて出て行った母も同類。

見兼ねたのか、相良さんは私がごはんを食べ損ねていると必ず外食に連れて行つてくれて、勉強につまずいていると家庭教師になってくれて、休日にはテーマパークで遊ばせてくれた。

こうやって、今みたいに助手席に乗せて、ひとりきりの家から連れ出してくれた。それで好きにならないわけがないよね。

「そういうえばプロポーズの日、お父さんに言つてたね。約束通りおまえの娘はもらう、つて。あれ、何だったの？」

「いい加減、子育てに責任を持つてほしくてな。次に再婚するようなら俺が娘を攫さらちまうぞ、つて言つてあつたんだ」

にもかかわらず三度目の再婚を決めた父に、堪忍袋の緒が切れたわけなのだろう。

やっぱりあのプロポーズは、私に振り向いてくれたからじゃないんだね。好きだ、結婚しよう、つて言つてくれたの……あれは夢だったのかな。

そんなことを考えている間に、車はカーブに差し掛かる。真意を問いたくても問えなくて、口を閉ざした私の体を庇かばいつつ、相良さんは後部座席を示す。

「香奈、うしろの席、見えるか」

「ん？」

「おまえに、本日最後の貢みつぎ物だ」

彼の親指が示す先を振り返つて、私は思わず大口を開けた。顎あごが外れるかと思つた。

「えっ、あれ……!?!」

某有名宝飾品店の箱。なんで!?

彼と後部座席を交互に見て目をしばたたく。

これ以上なんでもらえないよ！ そう言おうとした私はしかし、台詞せりふを寸前で呑み込んだ。『遠慮が過ぎると、本当に大事なものをなくしちゃうわよ』——との、財前さんの言葉が脳裏をよぎつたから。

「わ、わたしに？ もらつていいの？」

「他に誰がいるんだよ。俺はおまえ以外にはあんなものを、贈つたりしないぞ」
うそ……。恐る恐る後部座席に腕を伸ばし、小箱を引き寄せる。

震える手で開いてみると、暗がりの中でゴールドのチェーンが揺れた。

その先で眩まぶしく光を零すのは、大粒の、透明の石。

「相良さ……、これ」

このネックレス、先に下がってるの、ダイヤモンドだよな？

こんなにキラキラした石、他にないよね。

「……あれだ、俗に言うスイートテン」

「そ、そんな。まだ十年目になってないよ」

「いいだろ別に。余所よそは余所、うちはうちだ」

さらっと常套句じょうとうくを添えられて、言葉を失ってしまう。

こんなの私にはもったいなさすぎる。つけて行くところがないよ。

でも、でも、嬉しい。

「……おまえは良くやってくれてる。毎日、朝早くから弁当を作って、掃除をして、仕事に出て俺より先に帰宅して、美味しい飯を作って、風呂を沸かして待っててくれる。その価値に比べたら、ダイヤなんて安いもんだ」

堪えようとしたのに耐えきれず、熱いものが頬を伝った。相良さんが、そんな風に言ってくれるなんて……

「俺は立派な夫じゃない。留守がちだし、おまえに負担をかけてばかりだ」

「そ、そんなこと……っ」

「でも、篠竹相良の嫁が務まるのは世界でただ一人、香奈、おまえだけだと思ってる」

私はぶんぶん首を振る。涙がぼたぼた胸元に滴る。

本気で言ってるの？ 私なんてまだまだ至らない妻だよ。

「こんなオジサンの世話、飽き飽きしてないか？」

「……っく、な、なんでそんなこと、聞くの」

「毎年聞こうと思ってたよ。おまえはこのままで良いのかって」

「え……?」

「結婚したとき、本当におまえに必要なだったのは親だ。だから俺は夫と言いながら保護者のつもりだった。おまえをいつか、他の男に渡してやる日がくるんだと思ってた」

突然語られた本音に、恐怖のあまり涙が引っ込む。

保護者？ じゃあやつぱり相良さん、私のこと、今でも好きなわけじゃなくて……?」

「でもな、高校を卒業するまでは、ハタチになるまでは、と見守っていくうちに、俺はおまえじゃなきゃ駄目になってた」

俺はもうおまえじゃなきゃ駄目だよ、と相良さんは重ねて言いながら私の右手を掴み、口元へ持っていく。

驚いたのも束の間、右手の甲に落ちてきたのは優しい口づけだった。

「好きだよ、香奈。できることなら十年の節目を機に、俺とやり直して欲しいと思ってる」

「や、やりなお……す?」

「ああ。夫婦として、いや、恋愛から」

え、え? 恋愛って、誰と誰が?

混乱する私の手をギュッと握り直して、彼はもう一度、甲に唇を押し当てる。そうして、

「俺と恋から始めないか」

と、まるで念を押すかのように、言ったのだった。

2

こ、恋からはじめる、って——

言葉の意味を理解できないまま、辿り着いたのは箱根の山奥だった。目の前に建っているのは、とある小さな一軒のオーベルジュ……つまり宿泊施設を兼ねたレストランだ。白い外壁に赤い屋根瓦が、フランスの田舎町風で可愛い。周囲の森林とあいまって、ここが日本であることを忘れそうになる。いいなあ。こういうの、すごく好き。

しかし宿泊？ するの？ 相良さん、明日も仕事だよね？

疑問だらけであたふたする私に、彼は平然とショップバッグを差し出してくる。

「これ、着替え。あと化粧品だな。一泊に必要なものは全部入っているはずだ」

「は」

はい？ 意味が。意味が分からないのですけども。

首を傾げていると彼が先に車を降りてしまったので、慌てて追いかけた。

私、完全に置いてけぼりだ。特に精神が。

「——いらっしやいませ、篠竹さん」

すると、オーベルジュの玄関で出迎えてくれたのは三十代半ばと思しき長身の男性だった。

物腰が柔らかかで、丁寧な微笑み方はいかにも上流階級の人という感じがする。そう思ったのは、スーツがふんわりしたベージュ色でいかにも汚れに弱そうだからかもしれない。淡い色のスーツなんて、仕事着として普通は敬遠するはずだもの。

「おう、悪かったな。当日になって予約なんて」

「いえ、他ならぬ篠竹さんのためですし。初めまして奥様、宗治君（宗治君 弥と申します）と申します」

彼はどうやらオーナーらしく、聞けば都内に何店舗もレストランを経営するやり手のこと。

そんなお偉い方に深々と頭を下げられ、私の全身はすっかり冷や汗びつしよりになる。お、奥様って呼ばれた。他人から夫婦扱ひされるの、初めてかもしれない。

「か、か、香奈ですっ……、初めましてっ」

声が裏返りそうで、主人がお世話になっております——とか、気の利いたことは言えなかった。すると宗治さんはふいに意味深な間を置いて私の顔を見つめる。

「……可愛らしい奥様ですね。噂には聞いておりましたが、お若くていらっしやる。羨ましいです、篠竹さん」

そして直後、取り繕うようににっこり笑った。何だろう、含みのある表情だ。

「そ、そんなことは」

「だろ。俺もこの通り、すっかり骨抜きだ」

なんて大胆なことを言うのだろう。慌てふためく私の肩を抱き、自慢げにする彼をちよっとだけ憎いと思った。

「ところで奥様」

すると、レストランの席に辿り着いたところで宗治さんが椅子を引きながらそう切り出した。

「この店はコンセプトから内装、ロゴまですべて篠竹さんに手がけていただいたんです。お陰様で評判は上々ですよ」

「えっ、そうなんですか！」

知らなかった。

見ればテーブルの上の紙ナプキンには、ブルーグレーのインクでロゴマークが印刷されている。プロヴァンス風のモチーフを上品にちりばめた、相良さんらしいデザインだ。

——やっぱりすごいな、相良さん。

家ではあの通り寝坊ばかりしているし、私に対してそんな素振りは見せないけれど、実際、その道で彼は御所だ。同じ業界にいと、意識していなくても評判が耳に入る。そういうえば、今度美術館で個展を開く、と噂で聞いたけれど本当かな。どこで開くのだろうか？

そんなことを考えていると、「さっき言っただろ、車の中で」と冷やかな声が斜め前から聞こえた。

「宗治の店のデザインは随分と自由にやらせてもらった、って。聞いてなかったのか」
聞いて……いなかった模様です。状況証拠的に。

「ご、ごめんなさ……」

「ぼけっとしてたもんな、おまえ。何を聞いても生返事だったし」

「う……」

否定できない。

でも、だって、突然あんなことを言われたら上の空にだってなると思うのだ、普通は。口籠る私の前で、宗治さんはくすくす笑いながらグラスに水を注いでくれる。

背筋がぴんと伸びていききれいな立ち姿だ。モテるだろうな、と思った。

「仲がよろしいですね。今日は感謝を込めてとびっきりの料理をお出ししますので、ゆっくりしてってくださいね」

そう言って宗治さんがバックヤードへ去ると、広々としたフロアには私と相良さんだけが残された。他のお客さんはすでに全員食事を終えているらしい。それはそうだ。もう二十二時過ぎなのだから。

BGMはやけに静かなクラシックで、他に物音がないぶん、それが妙に耳について気になる。

私はそわそわと、テーブルの下で足先を擦り合わせた。だって相良さん、こっち、見てる……

「なあ、香奈」

「は、はいっつ」

「……何だ、叱られた新人みたいに縮み上がって。もしかして俺が車の中で言ったこと、気にしてるのか」

あっけらかんと言わないで欲しい。

「き、気にしない訳がないよ。いきなり恋とか、私、どうしたらいいか」

嬉しい、とは思う。これまでずっと片想いの延長みたいな結婚生活だったし。だけど突然すぎる上に提案も曖昧すぎて、対処に困るといふか。

「別に、おまえは何もしなくていい。おとなしく俺に口説かれていれば、それで」
「く、口説っ……!?!」

もうやだ。今日の相良さん、どうしちゃったのだろう。お酒を飲んでいるときよりずっと酔っぱらっているみたいだ。

「それとも、口説かれるなら俺より若い男のほうがいいか？」

「そ、そんなことない……」

「本当に？ たとえばさっきの宗治とか、おまえの勤め先の社長とか、俺より若いのに敏腕で容姿端麗な男はこの世にいくらでもいる。ああいうほうがおまえ好みだったりしないのか」

まさか。反論したいけれど言葉が続きそうになくて、ぶんぶんかぶりをふった。

私にとっては今、目の前にいる人が世界で一番素敵だ。結婚前には好きだって何度も言ったのに、どうして今さらそんなことを聞くの。

「あのときは俺、強引だったからな。香奈は何が何だか分からないうちに『篠竹』になってたんじゃないのか」

「分かってたよ！ 今でもちゃんと覚えてるし」

二人で市役所に婚姻届を出しに行った記念すべき日のことを、私が忘れるわけがない。だって奇跡だ。物心ついたときから大好きだった人が、自分の旦那さまになってくれるなんて。

「それは、嫌だったから、って意味で？」

「違っ……、な、なんだか意地悪だよ、その聞き方」

「どうして」

「……どう、してって……」

それは。

「う……疑われてる、みたいで。私の気持ち」

「まあ、それは否めないな」

「え……っ」

「変に勘ぐっているわけじゃない。だが無邪気に信じられるほど確証もない。何しろ俺はおまえの返答を聞いていない」

返答。それは先の、恋をしよう、という提案に対してだろう。それなら聞かれるまでもない。

「わ……わた、私、……恋なら」

恋なら、毎日してる。

結婚して、だらしないうところも合わないところも見つけたけれど、それと一緒に毎日スキを積み重ねてきた。

きつとこれからも、もつと好きになるよ。

そう言いたいのに、何故だか喉の奥でつかえてしまう、臆病な私の声。

変なたとえだけれど、気持ちって片栗粉みたいだ。

水で溶いた片栗粉みたい。揺らされれば簡単に流れていくのに、必死になって動かそうとすると急に難しくなる。

——片思い、ってわけじゃないのに……

どうしてこんなに言いにくいのだろう、好き、って。すると、

「まあいい。香奈、そのまま動くなよ」

と言って相良さんは突然立ち上がり、私の席のすぐうしろへやってきた。

「え、え？ あのだ。——ひゃっ」

途端、首筋に冷たいものが触れて震えてしまう。

視線を胸元に落としてみると、そこには先程プレゼントされたダイヤモンドが下がっていた。例のスイートテンだ。いつの間にか車から持ち出していたのだろう。

「無駄な装飾は好かないが、おまえに対してだけは、本当はずっとこうして飾ってやりたいと思っていた」

「相良さん……？」

私のつむじに唇を押し当て、相良さんは囁く。

「明日の仕事は片付けてきた」

低く、甘く、少し掠れた声で。

「おまえの勤務先にも、明日は欠勤だと連絡を入れてある。根回し、しすぎか」
くすぐったくて、肩に力が入ってしまう。なのに、毒が回っていくように、体の芯からみるみる力が抜ける感じがした。

「嫌なら指一本触れない。俺のことは思う存分焦らしてくれてかまわない。忍耐力のないガキとは違うから安心していい」

「焦らす……?」

「ああ。だから香奈、今夜は隣にいてくれないか。朝まで、俺の隣に」

「あ、さ?」

「……子供扱いするなと言ったのはおまえだったよな?」

相良さんは本日二度目の衝撃的な提案をして、何食わぬ顔で席に戻った。

(い……言った、けど)

子供扱いしないでよ、って、言ったのは私だけ。だけど……ほ、本当に?

狙いすましたかのように、宗治さんがオードブルを手にとってくる。食材の説明があったと思うのだけれど、ほとんど記憶に残っていない。料理の味も、また然り。

戸惑いながらも私は心の隅で、彼の行動に違和感を覚えていた。

——相良さん、何かあったんじゃないかな。

食事を終えた頃、私はすっかり疑心暗鬼に陥っていた。

それはそうだ。九年以上も側にいて、一度も手を出そうとしなかった私に、いきなり朝まで側にいてほしいなんて言うのはおかしい。けれど、尋ねようとするたびにタイミング良く宗治さんがやってくるから、私はなかなかその質問を言い出せなかった。

部屋に案内されたのは0時近くになってからだ。コースの品数が多かったこともあるけれど、そんなに夕食に時間をかけてしまったのは、ひとえに私がわたわたりしていたせい。挙動不審のまま、辿り着いた客室。そこは露天風呂付きという贅沢な作りで、シンプルな家具が上品に配されている。宗治さん曰く一番人気の部屋だそうで、本日はたまたまキャンセルがあって空いていたとのこと。流石は相良さんの作品だとは思ったものの、感心している余裕はなかった。

「香奈、どうした? 早く風呂に入れ」

目の前で、ばさ、とおもむろにシャツを脱がれて硬直してしまう。いや、相良さんの着替えならこれまでも何度も目にしていただけ。

一緒に暮らしているわけだし、お風呂上がりに遭遇するのは珍しいことじゃないし。でも。

「あ、あの、は、入れ、って」

「風呂だよ。そう言ってるだろ」

それは分かっている。私が聞きたいのは、入れ、と言いながら何故彼が服を脱ぎ出すのかということだ。動揺しきりで一步後退しようとする、右の二の腕を掴んで引き寄せられた。

「なんだ、もしかして手伝って欲しいのか。そうだよな、おまえ、こういう服は普段なかなか着ないもんな」

「えっ、ちよっ」

上半身が裸の彼に抱き寄せられ、広い胸板にクラリとしたのも束の間、背中のファスナーに指をかけられて慌てずにはいられない。

「ま、待っ……相良さ」

私、聞きたいことが。

ううん、その前に、思い出すべきことがある。まずい。このワンピースの中、オールシースルーの下着だ！

「やめ、やだっ、自分で脱げる……！」

「おい、動くな。服が裂けるぞ」

え。低い声と共にファスナーが唸って、私はピタリと動きを止めた。彼からのプレゼントを台無しにするわけにはいかない。それに、今の私は総額五千円以下の女じゃあない。

「……っ」

「そう、そのまま大人しくしているよ」

おデコに当たる生温かい唇の感触に震えると、ワンピースが肌を滑って床に落ちた。

ああ、ランジェリーなんて興味本位で身につけるんじゃないや。今こそ、遠慮するなんて言っていた財前さんを恨みたい。

「香奈、きれいだ。似合ってる」

「う、そ……っ」

うそだよ。きれいなものに囲まれて、きれいなものを日々生み出している彼の目に、私の体がきれいに映るはずがない。

なぜなら私の外見は細くもなければ、肉感的でセクシーなわけでもない。コンプレックスもないけれど強みもない。

ほどほど、という言葉が最もしっくりくる、無難な人間なのだから。

「な、んで今日、なの……っ」

ぶっ、とブラのホックが外される。恥ずかしい——はずかしい。

「妻を抱くの理由なんて言っているのか」

「だって朝は飲み会だって言ってたもの。急すぎるもの。相良さん、何か——」

あったんでしょ？

尋ねると、腰に回された腕がわずかに緩んだ。ふと見上げれば彼は思い詰めた顔をしていて、確信を持たないわけにはいかなかった。

「やっぱりそうだ。間違いない。」

「何があったの？ お願ひ、話して。興味本位じゃなくて知りたいよ。だって私、相良さんの奥さんなんだから」

相良さんのこと、一番に理解していたい。

それから少しの間、私は彼から目を離さなかった。話してくれるまで、視線は逸らさないつもりだった。すると彼は短く息を吐いて、脱力したようにうなだれた。

「やっぱり、おまえには敵わねえな」

右肩に顎をのせられて、びくっとしてしまふ。鬚が刺さって、ちくちく痛い。でも、痛いだけじゃなくて、くすぐったくて鳥肌が立って不思議な気分だ。

「そうだよ。不安なんだ、俺は」

情けないことに不安なんだよ、と相良さんは重ねて言って私の腰を強く抱く。

「今度、国立美術館で個展をやる。今日、日程が半年後に決まったとスポンサーから連絡が来た」

「……あ」

そうだ、噂で聞いたよ。相良さんが個展を開くって。

「大阪と、それからニューヨークも巡回するそうだ」

「ニユ、ニューヨークって相良さんも行くの？」

「ああ。開催期間中はこれまでに以上に家を空けることになる。おまえと過ごす時間が減る。だからその前に、決定打がなければ、俺は……」

その声はこれまでに聞いたことがないほど弱々しくて、けれど一番人間らしかった。「おまえは若い。俺でなくても、もっと良い相手を見つけられる。だが俺には香奈しかない。いないんだよ」

一歩、後退させられると、踵がベッドのふちにぶつかる。直後に私の体は背中から柔らかなものの上に倒れ込み、しかし声を上げる余裕もなかった。

「嫌がったら何もしないなんて嘘だ。泣かれようが騒がれようが俺は今夜おまえを自分のものにして、一生逃がさない」

熱っぽい宣言を聞いたのはベッドの上だ。

「あ、あの、相良さ……ひゃんっ」

大きくも小さくもない胸に顔を埋められて、くすぐったさというより気後れで身が縮む。平凡な体つきをこれ以上知られたくない。

年齢の割に筋肉がしっかりついている相良さんの体は、思うに努力の賜だ。財布にスポーツジムの会員証が入っているのを、私は知っている。

「あの、待っ……電気、消し……」

「消したら何も見えないぞろ」

「み、見られたくないから言ってるんだよ……っ、凝視し過ぎだっつてば……！」
 叫んでしまったのは、彼が普段、プロポーシオン抜群の美人モデルさん達と仕事をしていることを思い出したからだだった。凡庸な私とは天と地の差だろう。

「見せてくれよ。男は視覚で興奮する生き物なんだよ」

そんなことを言われても気が引ける。

かぶりを振ったら両腕を頭上で拘束されて、唯一身につけていた下着を一気に引き抜かれて、血の気が引いた。

無駄毛が。贅肉が。

「やーっ、電気ーっ」

「電気を消している間に逃げる気なんだろう？ 分かってる」

「分かっつてないし！ 逃げないってば。逃げないから、だから消してえ」

涙声で訴えた私を、相良さんは少々ムツとした顔で見下ろす。

「……説得力がねえんだよ。いつもいつも肝心な所で本音をはぐらかして、今日だって散々返答を避けて……っ」

それは結婚生活の中で彼が溜め込んだ、私への不満のようだった。

「連日飲み会だと言っても外食と引き換えにあっさり認められる。大したタダもこねられない。俺がニューヨークへ行くときも、おまえはきつと、ロクに引き止めやしないはずだ」

そんな。だって私は、相良さんのためを思っつて。

しかし言い訳をする間もなく、グ、と太ももの間に体を割り込まれ、完全に身動きが取れなくなる。とろりとした液体を下腹部に垂らされたけれど、それが相良さんの唾液であることは、にわかには認めたくなかった。

うそ、何か、足の間に当たって……

「っえ、った、……痛あ、っ」

体の中心が軋むように痛んだから、私は腰を引いてソレを回避しようとした。ソレが何なのかは、一応、未経験の私にも分かっている。

いくらなんでも、こんなの急すぎるよ。

けれど彼は追いかけてきて容赦なく私を貫きはじめる。

「ま、待って、や、あつ、いた、いたい」

「待てるか。いくらカマをかけても適当にあしらいやがって。俺はおまえにとって、それだけの存在か？」

激しい痛みと異物感に涙が滲む。

は、入ってきてる。痛い、びっくりするくらい痛い。背骨が軋むみたい。なのに、まだ届いていない奥のほうは何となく甘く疼うずいているような感じがして……
相良さん——さがらさん。浅い呼吸をしながら、その首にぎゅうっとしがみつく。苦しい、けれど、嬉しい。

「っは……、さがらさ、わ……わたし」

ぐ、ぐ、と押し込まれる体温。みるみるナカが埋まっていく。

こんな風に誰かとびったり肌を重ねたのは初めてだ。人肌ってこんなに、とろけるみたいに甘くて優しい感触なんだ。

男の人って、こんな——こんなふうだったんだ。

知らなかった。私、なにも。

（私、相良さんのこと、何も分かっていなかったんだね）

半分ほど繋がったところで動きを止めた彼に、私は震える唇でキスをする。

そんなふうに使われていたなら、もっと早く本音でぶつかればよかった。

「……ほんとはずっと、ワ、ワガママ言いたかったよ。旅行に行きたいとか、一緒に寝てほしいとか、好きって言ってほしいとか」

言いたかった。

「だけど私は奥さんだから、相良さんに無理させるの、だめだって思ったから」

「香奈」

「どこまで許されるのか、分からなくて。私、普通の夫婦がどんなのか知らない、……しらないんだもん。だけど、相良さんと、いい夫婦になりたいくて……っ」

我慢してでも相良さんの奥さんでいたくて。

それだけだったんだよ。

なんだか悔くやしくなってきた、半泣き状態でその胸をとんと叩いたら、覆おおい被かぶさるよう
に力強く抱き締められて、奥まで一気に貫かれた。

「あ、あ……っ」

とてつもない充足感。ずっと足りなかった部分が、やっと、補われたみたいな。

「俺の、妻でいてくれるか。これからも、何があっても」

「うん。うん……っ」

「——俺と、恋ができるな？」

痛みより感動で涙があふれる。彼の言葉の真意が、そのときようやくよく分かった気がした。

「もう、してるよお……っ！」

恋から。

それは夫婦を理由にしなくても、好きって気持ちだけで繋がれる関係になるということ。

「そうか、……動くぞ」

強引な挿入が嘘のように優しく揺らされて、胸の先を何度もついばまれる。

自分でもびびくりするくらい艶っぽい声が漏れて、困惑しながらも彼にしがみついた。

「ふは……っ、あ、す、き、相良さん、好き……っ」

「やっと言ったな」

「ん、っあ、あ……っ！」

抜き挿しの速度がはやまる。こうなるともう痛みなんて少しも感じなくて、ただ下腹の奥が甘く、とろけるように痺れていった。

胸の膨らみを根元から掴まれ、噛みつくみたいに愛撫する唇。間近で両胸が翻弄される様は全然いやらしくはなく、ただ愛おしい。

私、抱かれてる。相良さんに。

何の隔たりもなく、体を繋げてる。

「ん、っ嬉し、好き、ずっと、こうして欲しかった……」

心地いい。相良さんの腕の中で、私は心まで満たされてゆく。

「もっと言えよ。俺が好きだって、九年と十一ヶ月ぶん、言えよ……っ」

「んっ、好き、スキ……っ！」

何度もそう繰り返し囁いて、もう逃がさないように抱き締め返すと、窒息するくらい

激しいキスを与えられた。

出し挿れは、内壁を押し広げるゆったりした動きに変わる。好きだ、と何度も囁かれて、気絶してしまいそうなくらい幸せだった。

相良さんの熱を奥に受け止めたのは、それから間もなくのこと。

しかし彼は自分が出て行ってからも私の体を離さなくて、ベッドの中であちこちに触れ続けた。

「おまえはもう俺のものだ。誰にもやらない。離婚したいと言っても遅いからな」

「言わないよ、そんなの……っや、あ」

両胸の先を、舐めながらクニクニ弄られて声が漏れてしまう。

知らなかった。胸って、先端に触れられるだけでこんなに感じるんだ。

どんな体の中心が熱く痺れてくる。気持ちいいって、こういうこと？

初めて知る感覚に酔いはじめた私を抱き締め、彼は無骨な親指で割れ目の間をゆっくりと撫でた。

「ここ、触れても嫌じゃないか」

「ん、……っ、うん……」

嫌じゃない。相良さんなら、何をされてもいい。

震えながらそう答えた途端、中指を内側に埋め込まれて呼吸が止まるかと思った。

そのまま内壁を押し広げられ、かき混ぜられて、わけが分からなくなる。私、いま、何をされてるの？ 嫌じゃないけど、分からない。

こういうのって、男の人が終わったら終わるんじゃないの？ ねえ、これ、なに—— 割れ目の間の痛いくらい敏感なところを探り当てられ、腰が勝手に跳ね上がった。何故だか、啜くもえ込んだ中指を焦じれたく感じはじめた。

少し、怖い。でも、もつと深くまで触れて欲しい。もつと強く触れて欲しい。

もつと、もつと。

「ふあつ、あ、あつん、相良さ、わ、わたし」

「どうした、ナカ、まだ痛いか」

「ちが……っ、あ、っ分かんない、あ、いや」

嫌なのかな？ と尋ねながら私の胸を掴んで、揺らして、舐め上げる彼に行為をやめる気配はない。

これまで知らなかった感覚が呼び覚まされる気がして、もうダメだ、と思った。

「ダメ、ぎゅってして、お願い、ギョッってして、え」

「上手にねだれるじゃないか。そんなワガママを、普段からもつと聞かせろよ」

「ん、もうダメ、え……！！」

でも、何がどんな風にダメなのかは具体的には分からない。

ただ、お腹の中で長い指が跳ねるみたいに動いているのが分かって。

足の間、くちゅくちゅ湿った音を立てて親指が動くたびに何かが入り込んでくる。

膨らみを揉まれながら先端を吸われると、どこがいいのか分からないくらい敏感に感じてしまった。

全部がきもちよくて、頭がショートしそうになる。

「可愛い、香奈。いい声だ」

「あつ、あ、あう」

「……そうだ、そのまま力を抜いて、俺おれに委ねろ」

「あ、つなにか、くる、きちゃう——っあ、ふ、ああああつ!!」

一瞬、体全体の制御がきかなくなる。自分の体じゃないみたい。目の前が真っ白になったあと、快感に吞まれて私は無意識のうちに腰を震わせていた。

空気が甘い。背中に当たるシーツの感触でさえ、とろけるようだ。

「は、はあつ……は……っ」

「香奈、少しは良くなったか」

「ん、……ん」

少しどころじゃない。こんなに気持ちいいと思ったのは、生まれて初めて。

伝えたいけれど、うまく喋れない。感覚がすべて、潮が引くように遠くなっていく。「さつきは痛い思いをさせちまったからな。恐怖心が残らないよう、快感だけをもっと与えてやる」

「え……?」

それからバスルームに連れていかれて、体中を優しく洗われた。

抗う気力は残っておらず、私はなすがまま、湯船の中で両胸を弄られながら指の抜き挿しを許したのだった。

ベッドに戻ると、相良さんはもう一度体を繋げてきた。

洗ったばかりの私の体は、抵抗もなくそれを受け入れてふたたび満たされる。

二度目は「初めて」が比べものにならないほど良くて、私は声を上げ続けた。

眠りに落ちたのは、彼の熱をふたたび受け止めたか受け止めないか、といったとき。

それから明け方まで彼の腕の中で過ごした。結婚して初めて、彼の腕枕で眠った。

ずうっと、彼の体温に包まれていた。

涙が出るほど幸せだった。

こうして私は、相良さんと『本当の夫婦』になったのだった。

「……ご、ごえがでない……」

「ぶはっ、なんだその声、カエルでも丸呑みしたみたいだな」

寝起き、そう言って大笑いしてくれた相良さんに私はムツとして枕を見舞う。

——誰のせいだと思ってるの。責任をとりなさいっ。

宗治さんは風邪を心配して常備薬をいくつも分けてくれたけれど、本当の理由なんて言えっこなかった。一晩中、声を上げすぎて嘔れてしまった、なんて。

心の中で「ごめんなさいごめんなさい」と必死に詫びつつ、自宅へ向けてオーベルジュを発つ。

「ざがらざん……あのね、わだし」

「ああ、無理して喋るな。コンビニでノドアメでも買ってやるから、それまでちょっと黙ってるろ」

「やだ。忘れないうちに、言っておきたいワガママがある」

「決め台詞みたいな文句だな。声も洪いし、やけにカッコいいぞ」

「うー」

だから誰のせいだと。

宗治さんに淹れてもらった生姜紅茶入りのサーモマグを傾けつつ、私は運転席の彼を恨めしく見つめる。

まあいいや。たとえ笑われても、これだけは早いところ打ち明けておかなきゃ。

「あのね、私、相良さんの下で働きたいの」

「ど、どうした。いきなり」

「だって。せっかく同じ業界にいるんだもの。夫婦なんだし、私だって少しは勉強もしたし、アシスタントくらいさせてもらえないかな、って思ってる」

ずっとしてみたかったんだ、この提案。

いつか彼のほうから誘ってくれるのではないかと期待していたけれど、待つのはやめにする。口に出して言わなければ伝わらないこともあるとわかったから。

しかし――

「断る。それだけは駄目だ」

少しは考えてくれるかと思いきや、相良さんは即答してハンドルを握りなおす。

「どうして！ ワガママを聞かせろって言ったの、相良さんだよ」

納得がいけない。いつぼう、相良さんも簡単に折れる気はないようだ。

「それとこれとは別問題なんだよ。俺はおまえを部下にする気はない。どんなに優秀でも、有能な人材だとしてもな」

「私が側にいたら迷惑ってこと？」

そうじゃねえよ、と小声で言っただけをこちらを見る相良さんは、弱り切った顔をしている。

どうしてそんな顔をするのだろう。やっと決意して申し出たのに。

「あのな、香奈は俺が怒鳴ったところ、見たことがあるか。ねえだろ。つまりそういうことだ」

「つまりの意味が分からないんだけど」

「……おまえだけは荒々しく叱れねえって言ってるの。俺はお前を怒鳴れねえんだよ。通過儀礼として新人をもれなくドヤしてる現場で、お前にだけ甘い態度をしていたらしめしがつかねえだろうが」

――は。

私は大口を開けて、彼を二度見した。叱れない……って、まさかそれだけの理由で私をずっと現場から遠ざけてたの？

「やだ、相良さん、愛情表現、下手すぎ……っあははは！」

「笑うな。俺だって悩んだんだよ。側には置いておきたいが、終始メロメロになるのは目に見えてるからな」

「も、どうしよ、このオジサン可愛い……！」

「るせえ、オジサン言うな。おまえの亭主だ」

いつもは自分で言うくせに。

ますます不貞腐れる彼を見て、私は笑いが止まらなくなる。

これまで築いてきた相良さん像が一気に崩れてしまいそう。でも、そこが妙に愛おしくて——幸せ。

私はお腹を抱えてひとしきり笑って、心の底から幸せだと思つて、滲んだ涙を笑いにせいにしてみまかして、それからこう提案しなおした。

「じゃあ、お給料はいらぬからお手伝いさせてもらえないかな」

「ああ？ 俺はボランティアだろうが叱るときは叱る。通過儀礼の対象外にはならぬぞ」

「ううん、ボランティアとかじゃなくて」

部下でなければいいんだよね。私は口角を上げて彼を覗き込む。相良さんが厳しい態度で接しなくてもおかしくない立場ならいいんでしょ？

「私を妻として側において。ニューヨークにも一緒に連れて行って」

展示会のときにレセプションパーティーがあるのは知っているのだ。そのとき、出席者はパートナー同伴を義務付けられているのも、噂で聞いている。

離れるのが不安なら、ついていけばいいんだよ。簡単な答えじゃない？

「何を言つて……配偶者が出席すればゲストが放つておかねえぞ。パーティーでは引つきりなしに話しかけられる。関係者に挨拶しなきゃならないし、世話になった人間へのフォローも必要だ」

「分かつてる。それまでに、必要なことならなんでも覚えるよ。相良さんの妻として、恥ずかしくない人間になれるように頑張る。だからお願い、私に個展のお手伝いをさせて」
途端に無言になった夫を見て、これは脈アリだなと思う私、少しは奥さんとして馴染んできているのかな？ なんて。

ともかくにも、私の待望の「新婚生活」は、こうして幕を開けたのだった。

3

夫婦、つて、はたしてどこまでが許される範囲だろう。

範囲、と言つても旅行へ行きたいわけではなくて、逃げたいわけでもなくて、言うなれば許容する、という意味で。

私は彼にどれだけのことを要求しても許される？

反対に、私はどこまで彼の行為を許すべきなの？

(く、くるしい……)

念願だった『相良さんの本当の奥さん』になってから四日目、私は窒息しそうな苦し

さの中で目を覚ました。

そう、たとえではなくリアルに呼吸ができないわけだ。肩でふうふう息をしながら、ベッドの端へ逃げようと試みる。酸素が足りない。けれど彼は恐らく無意識のうちで、寝息を立てたまま私を引き寄せ、やっと設けた隙間を埋めてしまう。筋力質な腕のみならず太ももまで腹部にのせられたら、ぐうっと低い呻き声が漏れた。

(新婚って、酸素缶が必要ですよ……!?)

要するに私は、彼の抱き枕状態なのだ。

肺がすっかり潰されて、身動きどころか呼吸さえままならない。苦しい。

昨日から相良さんはこの調子で、おかげで私は二晩連続の深刻な寝不足に陥っていた。一昨日、初めての朝はこんなふうではなかったのに——うん、あのときはものすごく眠りが深かったから、覚えていないだけかもしれない。

世の奥様方はこんな毎日、どうやって乗り越えているのだろう。酸素ボンベでもベッドの下に置いていたりするのか……

と、そこで聞こえていた寝息がピタリとやんで、彼の顔が私の左頬に寄せられた。

「……か、な」

左耳のそばで響くのは、寝ぼけた声だ。

「おはよう……」

ちゅ、とこめかみに唇を押しあてられ、体の芯が淡く緩む。わ、くすぐったい。

しかし返答しようとして開いた唇は、声を発することなく虚しく閉じた。理由は推して知るべし、酸素不足だ。

「ああ、お前と寝ると寝覚めがいいな。早く顔が見たくて、勝手に目が開いちゃう」

「……っふ、さ、さが、さ……」

「どうした、色っぽい声なんて出して。朝から襲われたいのか」

いや、違う。苦しいのだ。

襲われたいかどうかについては、できれば察してほしい。

だって初めての夜以降、帰宅が遅かった彼とは添い寝だけで早三目。そろそろ……淋しいと思うのは早すぎるだろうか。

この気持ち、私から打ち明けたらおかしい？ どのくらいの頻度でするのが普通なの？ 誘い文句って、どんなのが一般的？

そんなことを考えているうちにいよいよ酸素不足に耐えきれなくなって、私は腹部にのしかかっている彼の左の太ももを叩いた。

「う、……ふう、うん……っ！」

ギブです！

と、重石おもしになって自分の足に気付いたのか、彼は慌ててそれを退ひかしつつ、笑う。「はは、悪い、重かったか」

「つは、はふ、ふうっ」

「昨日に引き続きまたやっちゃまったな。注意しようと思ってたんだが、つい。あはは」笑っている場合じゃないと思う。こちらは生命活動の危機だったのだ。けれど彼が笑うたびに一緒になって視界が揺れて、私の気持ちもふわふわ揺れた。

しあわせだな。ふたりに眠るベッドは、こうしてどこか繋がっている感じがとてもいい。

「……も、つい、じゃないよ。こっちは一晩中プロレス技をかけられてる気分なんだよ」

「仕方ないだろ。香奈は息苦しそうな声もかわいい。そんなだから抱き締めたくなるんだ」

「なにそれ、責任転嫁てんかも甚はなはだし——きゃっ！」

もう一度同じ体勢にもどされて、猫でも可愛がるようにあちこち撫でられる。

大きな掌てのひらは少し乱暴らんぼうだけどやさしくて、私はやはりわけもなく甘い感じを覚えて、言

おうとしていた文句をうっかり忘れてしまった。

相良さんは、とことんズルイ。

朝から彼に離してもらえなかったせいで、私は起床予定時刻を大幅にオーバー。代償にお弁当作りを諦あきらめる羽目になった。

昨晚から漬けていた生姜焼き用のお肉が冷蔵庫の中にあるのだけ……仕方ない、あはは夕飯にしよう。

大慌おどろいで朝食を準備し、相良さんに食べてもらっている間に着替えを済ませる。

そう、今朝は二度寝はしないのだ。

というのも本日は、初めて彼の職場にお邪魔させてもらう日。妻として仲間にお披露目される手筈てはずになっている。

つまり一緒にニューヨークへ行きたい、相良さんの個展のサポートをしたい、という私の願いは無事に受け入れられたのだった。

そして業界でも名高いアートディレクター篠竹相良のサポート役なんて大役が付け焼き刃で務まるわけではないから、まずは職場の雰囲気馴染むところから始めて、彼の仕事を理解することにしたというわけなのだ。

「よし、戸締りオッケー、ガスの元栓オッケー、財布は持ったし、あとは何とかなるかな」相良さんもいるしね。

気合いを入れて玄関の鍵をかけて門を出ると、門の前まで彼が車をまわしてくれている。焦こもった様子で、窓から身を乗り出して私を呼ぶ。

「早く乗れ、遅れる。どうしてお前は毎回出がけにモタつくんだ！」

「主婦は準備が大変なのっ」

「前もって用意しておけて。しっかし香奈を乗せて出勤なんて新鮮だな。同伴出勤みたいだ」

「同伴……、ふうん」

相良さんも、女の人が接客するような飲み屋さんへ行ったりしているということ？

釈然としない気分で助手席に乗り込んだ私に、彼は慌てた様子で取り繕う。

「行きたくて行っていたわけじゃない。男には付き合いつてもものがあるんだよ。おまえと結婚してからは断り続けてるから安心しろ」

「嘘。やけに早口だもん。おおかた、取引先の人に誘われて断りきれなかったんでしょ」

「……」

「やっぱりね」

妻はお見通しです。

それにしても、仕事とはいえ綺麗な女の子たちに囲まれてお酒を飲むなんて、想像するとすごく嫌な気持ちになる。できることなら付き合っても行ってほしくない。仕事でも、義理でも、だ。

でも仕方ないということはわかっている。妻ならば許容すべきだし、いちいち気にするのも心が狭い。気にしないよと言いたいけれど、まったく気にしていないと思われるのも嫌だな。

立ち読みサンプルはここまで

悩みつつ横目で彼を見ていたら、赤信号でふいに唇を奪われた。

「妬かないのか？」

「あ……」

そうか、今は言わなくちゃいけないところ。

「い、行っちゃやだ」

「うん？」

「私以外の女の子と、お酒を飲んだら嫌。お付き合いでも……嫌だ」

「よし、その調子だ」

「は……」

彼がわざと思わせぶりの態度を取ったのだと、気付いたのはそのときだ。もしかして早口で喋ってみせたのも計算のうちだったとか？

目をしばたたく私を横目で見ながら、彼は満足そうに口角を上げる。

「今日は早めに帰るから」

「ホント!？」

「ああ。と、言っても二十時は回っちゃまうだろうが。事務所でのおまえの世話は財前に頼んであるから、適当なところで家まで送ってもらえ」

……ええ。